

プラトンにおける心臓と魂・こころ

出村 和彦

はじめに

アウグスティヌスの『告白』を読むと、アウグスティヌスが繰り返し自分の心に呼びかけ、大きな謎となる深い淵のような自分の心が絶えず問題として提示され、その不安な心の最後の安らいへの道程が全巻を通じて明らかにされていることが強く印象づけられる。アウグスティヌスにおいて、「心」はまさに中心概念の一つであり、彼の人格の全体を言い表す言葉である¹⁾。その際、「心」を表す語 *cor* は、まさに「心臓」を表す語であり、精神活動や生命活動を司る *animus* ないし *anima* とは区別された独自の次元を形成する言葉となっていることが確認される²⁾。

有名な「あなたの言葉で、あなたは私の心を貫きました。それで、私はあなたを愛してしまいました」(10.6.8)、「あなたの愛の矢で、あなたは私たちの心を貫きました」(9.2.3) という表現は、「私の最も内奥」という「心」の位置が、「心臓」に定位していることを鮮やかに示し、以来、矢で貫かれた心臓はアウグスティヌスの図像のアトリビュートになっている³⁾。また、西欧中世末期に、キリストの受難とその血による救済を象徴するものとして、傷ついた心臓そのものを大きく描く図像が数多く描かれている⁴⁾。近代に入って、「聖心 (the Sacred Heart)」すなわち「イエズスのみこころ」さらに「マリアの汚れなきみこころ」など、「みこころ」信心は隆盛を極めるが、そこには日本語の「みこころ」という響きとは趣を異にする「心臓」

そのものの図示とそれへの意識の集中が明示されるのである。心臓によって、人の全体を表す表象は、西欧固有のものではなく、たとえば、エジプトでは、死者は、ただ心臓のみが他の臓器とは別に身体とともにミイラにされるのみならず、葬祭用の『死者の書』には、死者のすべてを表すものとして心臓が描かれている。オシリス神の前に、死後の審判の天秤の左右に掛けられるのは、真理と正義のシンボルであるマアトの羽と、当人の心臓そのものである。この心臓が正義と釣り合えば、永生を得るが、釣り合わねば、怪物に捕って食われ消滅してしまうとされている⁵⁾。

ひるがえって、ギリシア哲学、とりわけプラトンではどうだったであろうか。あの『ゴルギアス』での死後の審判のミュートスでは、裁きにかけられるのは、生前の全生涯の行状が吟味されるのは裸にされた「魂(ψυχή)」であって、決して、「心臓」が取り出されていたのではないことがすぐに思い出される(523e)。それでは、そもそも、魂と心臓はどう関わっていると、ギリシア哲学では考えられていたのだろうか。一つの解答例は、ストア派の主張で、「魂のもっとも主要な部分は統括的部分(ἡγεμονικόν)であり、それによって、表象や衝動が生じ、そこから、言葉が発される。まさに、その統括的部分は、心臓の中にあるのである」というものであろう⁶⁾。また、アリストテレスは、「感覚的魂と栄養的魂の起源は心臓にある」と述べている⁷⁾。また、動物の運動の起源を考察するに際して、彼は、身体の中心部のいわば支点の位置にある心臓に着目し、動物がまさに欲求を働かせて、「動かされて動かす」という運動の源泉となる力を「生来の氣息」に認める説を受け入れて、「運動の起源はある動物では心臓内にあり、ある動物では心臓に相当する部分にあるので、生来の氣息もそこにあるものと思われる」と結論している⁸⁾。「魂はどこに」という問いに、「それは心臓の中にある」とし、「心臓は魂にとって何をするのか」という問いに、「それは感覚などの始源の働きをする場所である」という答えは、モノとモノとの関係として魂と心臓の関係をはっきりさせたものには違いない。しかし、「こころ」と言いたくなる「魂」と、やはり「心」と言いたくなる「ハート(心臓)」の関係を明らかにするものではない。事実、アリストテレスも『デ・アニマ(心とは何か)』や『ニコマコス倫理学』の中では「心臓」への言及はほとんどない。「魂・こころ」を、身体

の一部である「心臓」に結びつけて考えることがそもそも問題をはらんでいるのであろうか。してみれば、西欧やエジプトの表象と対比して、ギリシア哲学はどのような志向を持っていたと言うべきであろうか。本論ではまず、プラトンに定位してその方向を見定めていくことにしよう。

1

プラトンは、心臓 (καρδία) という語を、全対話篇の中で、以下の17箇所を用いている⁹⁾。

Ion 535c8.

Symp. 215e2; 218a3.

Phd. 94d8*; 94e1*; 118a3.

R. I. 331a6.

R. III. 389e13*; 390d4*; 390d5*.

R. IV. 441b6*.

R. VI. 492c3.

Tim. 65d1; 70a7; 70c1; 70d3.

Laws VII. 791a5.

一見して、プラトン全対話篇における「魂・こころ」としての ψυχή の多用とその重要性に比べて、驚くほど少ない用例と言わなければならない。しかし、そこに何らかの特徴が見いだせはしないだろうか。

まず、気がつくのは、そのうち、*印を付した『パイドン』2例と『国家』の4例は、ホメロスの引用における καρδίη というかたちであることである。また、『国家』の他の2例も、一つはピンダロス (fr.202)¹⁰⁾、もう一つは当時の諺の引用¹¹⁾であり、以上で、詩句等の引用例が全体の用例の半数を占めるということである。そこにはプラトン独自の用法はないことになる。それでは、地の文におけるその他の用例はどうであろうか。『イオン』、『法律』での用例は、心臓の鼓動に関するもので要するに「どきどきする」ということを述べただけのものである¹²⁾。また、『パイドン』の最終部分で、毒杯をあおぐソクラテスに対して、刑吏が、毒が回ってきて感覚のない冷たさが足先から徐々に進んできて、「ついに心臓まで達した

ときが最期の時です」と告げるときに、まさに心臓が言及されている¹³⁾。『饗宴』では、ソクラテスに会ったときのアルキビアデスはその心持ちを告白する部分で、「じっさいこの人の話を聞くごとに、ぼくの心臓は、あの秘儀に参じる熱狂的なコリュバンテスよりもずっとはげしく動悸がし、涙が出るのだ」と言っている¹⁴⁾。これはまさに、「僕の心は高鳴った」と言うことの比喩と言うより、じっさい「はげしく動悸がした」ということを述べたものであろう。ただし、その直後の箇所、アルキビアデスは、ソクラテスによって「人間が噛まれる場所としては、いちばん痛いところを噛まれたのだ。つまり、心臓というか魂というか、まあどんな名前でも呼ぶにして、そこを、あの知を愛し求めてなされる言論によって、ぶんなぐられ、噛みつかれたのだ。しかもそれは、ひとたび凡庸ならぬ若い魂をつかまえたら、毒蛇よりもはげしくとりついて、その魂にどんなことでもさせたり、言わせたりするものなのだ」と言っている¹⁵⁾。ここでは、「心臓が噛まれること」と「魂がつかまれる」ことがなんらか重ねられて、心臓がその人のこころの核心を衝くものとして位置づけられていることは、注目に値する。しかしここで、「心臓」はすぐに(若い人の)「魂」と言い換えられている。魂を「こころ」と読み替えても差し支えないが、ここで敢えて「心臓」をこころの働きを持った「心」であると考えていることを強く支持するテキストとは言い難い。さらに、言論を聞くことと心臓との関係を取りたてて明らかにするものでもない。

以上で、主としてプラトンの地の文に現れた「カルディア(心臓)」の用例を通覧したわけであるが、先にも述べたように、これら以外は、『タイムイオス』の4例を除いて、すべてホメロスの引用としてテキストに登場するのである。しかも、『パイドン』と『国家』のみにそれらは現れる。

注目に値するのは、『パイドン』と『国家』第3巻および第4巻で、ホメロス『オデュッセイアー』第20巻17-18の同じ詩句が、引用され、それぞれの文脈で、彼の考察の典拠とされていることである¹⁶⁾。その同じ詩句とは、

「かれは胸を打ち、自分の心(κραδίην)をこう言って叱った、
耐え忍べ、わが心よ(κραδίη), おまえは昔もつと恥ずかしいことに耐

えたではないか」

というものである。

この詩句が発せられるのは、まさにオデュッセウスが、身をやつして帰郷してみると、留守宅が求婚者たちに好き放題にされて、留守宅の侍女たちも彼らに通じてしまっている様子をまざまざと見せつけられて、オデュッセウスが憤怒を抱く場面である。彼は憤りながらも、今討って出るのではなく、時機を待つべくしばし堪忍する際に、彼によって発せられる言葉がこれである。この詩句は、『国家』第3巻では尚武の気風を養うものとして、守護者の教育のために推賞されている¹⁷⁾。『パイドン』と『国家』第4巻では、あのオデュッセウスにみられたような、こころの葛藤とも言うべき状態に焦点が集められている¹⁸⁾。しかし、その内実は両書で大きく異なる。プラトンにとってこの詩句が、どうして繰り返されるほど重要であったのだろうか。

そもそも、ホメロスが引用され、議論の典拠とされているとはいえ、「プラトンにとってホメロスの詩句は何であったか」という重要な問題に我々は直面する。その際、詩的言語一般の真実性については、ホメロス語りが吟味にかけられる『イオン』の解説や『国家』第10巻のいわゆる「詩人追放論」の解釈がすぐに念頭にのぼるであろう。その限り、プラトンがまともにその字義通り信じていたなどとはにわかには信じがたいものがある。しかし、ここでは、詩人ホメロスに対して一般にプラトンが持つとされる一定の教説から個々の詩句を評定するのではなく、文脈を形成し引用の地となっている議論の進行と引用されるホメロスの詩句との重なり合い、ないし、ぶつかり合いから、そのようにテキストを織りなしている著者プラトンの探求の方向を見定めたいのである。

われわれには計り知れないほど、対話篇の著者プラトンも4世紀のその読者たちも、ホメロスの詩句を熟知していた。しかし同時に、ホメロスと古典期との時代の隔たりは大きく、両者の想念は、同じ言葉が使われているとしても大きく異なることに細心の注意が払われなければならない¹⁹⁾。しかも、対話篇は、前4世紀の作者プラトンが、前5世紀のソクラテスが対話の論を進めている様として、いわば突き放して描いているわ

けで、そこにも一種のずれというか留保が認められるはずである。何よりも、前5世紀は啓蒙の時代であった。ホメロスでは、横隔膜や心臓などの身体部位は、それぞれ独立して、知見や気概をもっていると考えられていた。これに対して、たとえば、ヒポクラテス文書には、次のような一節がある。「私は、脳が意識の伝達者であると主張するものである。横隔膜(φρενός)がこの理知力(φρόνησις)と呼ばれているのは、偶然としきたりによるものであって、真実にも自然にも基づくものではない。……ある人々はわれわれは心臓でものを考える(φρονεῖν)という、また苦痛を感じたり悲しんだりするのも心臓であるという。しかしこれは本当ではない。心臓が横隔膜のように、いやそれ以上に振動するのは次の理由によるにすぎない。すなわち心臓には全身から脈管が延びてきており、それらを心臓が統括しているからで、人体に苦痛や緊張がくると、それを感じるのである。……(横隔膜も心臓も)どちらも知性(φρόνησις)にあずかっておらず、これらすべての原因は脳なのである」²⁰⁾。プラトンがこのような考えを知らなかったはずはない。いなそれどころか、ソクラテスその人をこのような考えを熟知している人物として登場させている。『パイドン』のソクラテスは、そのすぐ後の箇所では、かつて、自然の探究に熱中して、例えば、「われわれが思考するのは血液によってなのか、それとも空気によってなのか、あるいは火によってなのか。それとも、これらのいずれでもなくて、脳が視覚や聴覚や嗅覚などの諸感覚を提供し、これらの諸感覚から記憶と判断が生じ、記憶と判断が安定すると、そこから知識が生ずるのか。これらのことを考察しながら、ついに自分がこういう研究に生まれつき全く才能がないということに思い至った」と述べていく²¹⁾。この同じソクラテスがホメロスを引いているところに一つのドラマがあるのである。

さて、まず、このホメロス『オデュッセイア』の引用が最初に登場する『パイドン』では、魂・こころそれ自体が、たとえば琴の弦のような調和であるという説を反駁する文脈において、この詩句が引用されている。すなわち、まず、「魂・こころが、調和であるとすれば、魂・こころをつくっている構成要素とは反対の歌を決して歌うことができない。構成要素である弦は、締められたり弛められたり弾かれたりその他何であれそういう情

態を被るとき、調和はただこれらの情態に追従するのであり、これを支配することはない。「しかるに、魂・こころは、ひとが挙げるところの、魂・こころを構成しているすべての要素に対して命令を下し全生涯を通じてほとんどすべての点でそれらに反対し、あらゆる仕方でそれらを支配し、ある場合には、鍛錬や医療のように、厳しく痛い目にあわせ懲らしめたり、あるいは、もっと穏やかに、脅したり戒めたりしながら、欲望や怒りや恐怖に対して、別のものとして語りかけるのではないか」という、いわば事実に基づく論点を提出する。

そして、これに加えて、「これは、おそらく、ホメロスが、『オデュッセイア』のなかで歌ったことであり、そこで彼はオデュッセウスについて「かれは胸を打ち、自分の心をこう言って叱った、耐え忍べ、わが心よ、おまえは昔もっと恥ずかしいことに耐えたではないか」と歌っているではないか」と、ホメロスをこの事実を証左する典拠として引き合いに出して「ホメロスがこう歌ったとき、彼は魂・こころが調和であり、肉体の諸情態によって引きずり回されるようなものと考えていた、と君は思うかね」と、問いかけている。そして、以上の二点から、「こころは、肉体の諸情態を引きずり回し、それらの主人となるようなものであり、調和という在り方そのものよりも(それを越えたそれを生み出す原因として)はるかに神的な何かと考えていたのではないか」とされているのである。魂・こころが調和そのものであるという説を受け入れると「思うに、われわれは神のような詩人ホメロスともわれわれ自身とも仲たがいすることになるだろうから」と、ここでのソクラテスは結論している²²⁾。

『パイドン』の議論は、独立存在する魂・こころの確立が急務であり、これに対立するもろもろの情念は、魂・こころの内側の問題ではなく、ひとえに肉体・身体のものとして、外側に集約化しているのである。これは『パイドン』の探求の特徴であり、いわゆる、こころとからだの二元論の構図を描き出すのである。しかし、その代償として、ホメロスで生き生きとした独立の働きを為していた気概(θυμός)の消去という事態を招いている。その証拠に、こころの命令する働きに対立する諸情念として枚挙されているのは、欲望と怒りと恐怖などである。これに対して、ホメロスの

「心 (κράδιη = καρδία)」は、明らかに、単なる欲望や理不尽な怒りに還元されるものではなく、同時に、「かつてのように堪え忍ぶ力」も備えたものであったに違いない。「心臓」がそのような「心」を表し、魂はそのような自身の情念への関わりを持つという事態に対し、『パイドン』では、これを魂の向こうに据えて、手前に一步踏みとどまっているのである。本来ここで要請されるのは、情念・感情 (パトス) 論であり、これに人の魂・こころがどう関わるかという問題であるのだが、『パイドン』では、何か単純化され、一切を肉体ないし欲望という仕方で、魂・こころと切り離されていく。だが、プラトンはいつまでもこの立場にとどまっていなかった²³⁾。こころの葛藤を解明することは、『国家』の重要なテーマとなっており、あの詩句も、もう一度引用されるのである。

2

『国家』第4巻は、国家ポリスの三部分説を提示した上で、単にこれらと同じものを三つならべるという仕方で、小文字としての魂・こころの三部分を提示するのではなく、まず、欲するものとそれを引き留めるものとの対立緊張の原理から、欲望と理知を別のものとしてえぐり出した後、次に、レオンティノスの事例を持ち出して、欲望と気概が別のものであることを示唆する。すなわち、アグライオンの子レオンティノスが、城壁に外に沿ってやってくる途中、処刑吏のそばに死体が横たわっているのに気づいて、「見たいという欲望にとらえられると同時に、他方では、嫌悪の情をもよおし、身をひるがえそうとした。そうしてしばらくは、(欲望と嫌悪の情が) 戦いながら、顔を覆っていたが、ついに、欲望に打ちまかされて、眼をかつと見開き、死体のそばへ駆け寄って叫んだ、この美しい見物を堪能せよと」。この例を持ち出して、ソクラテスは「怒りは時には欲望と戦うことがあり、この戦いあうもの同士は互いに別のものであることを示している」とするのである²⁴⁾。

その際、気概の役目は、微妙である。ポリスの三部分説になぞらえて、「いわば番犬のように、国家の羊飼いとすべき支配者たちの命に従う」

かの補助者・戦士のように、「こころの中で起こる内乱にあたっては、むしろはるかに、理知的部分に味方して武器を取るものである」ことが確認される一方で、グラウコンの言うように、欲望に近いものであり、子どもでも生まれながらにもっているこの部分に対し、理知的部分はあるものは無縁あるものはずっと後になってから身につけるものという事実からも、気概は理知とは違ふと請け合う。そして、ソクラテスは、さらに、先のホメロスの詩句「彼は胸を打ちこう言って心を咎めた」を証拠として引いて、「ホメロスはこちらで、明らかに、こころの一つの働きをもう一つの働きと対峙させて、より善いより悪いを勘考する部分が、考えなしに憤慨している部分を叱りつける様を描いているのだ」と結んでいる²⁵⁾。

パイドンに見られるように、この二つをより神的な部分と激情の部分との二分として読むことも可能であるが、国家では、気概の二重の働きに視線が注がれている。おそらく、プラトンはテューモエイデスの中に二つの種別を、あるいはテューモエイデス気概の部分とテューモスとしての激情や怒りそのものとを区別して考えているのではないだろうか。その際、「心臓」は、理知に近いながらも、どちらかというところ、アロギスモに憤慨する気概そのものに指定しているようである。しかし、心臓のそのような反応は、即欲望と同一視されるのではない。レオンティノスは身をひるがえそうとする嫌悪感、目前の不正に我慢のならない憤怒を覚える部分としていることが特徴的である。プラトンのこころにおける心臓の位置は、このような義憤の心を指すものと言ってもよいであろう。

「心」をめぐるホメロスの引用は、このような気概(θυμός)と気概的部分(θυμοειδής)についての考察の文脈に置かれている。すなわち、まず、気概が欲望と退治するように説き起こされながら(レオンティノスの例)ホメロスを証拠に善悪を勘考する理知的部分によって叱りつけられる「分別をわきまえずに憤慨しているもの」として、理知的部分とは別の種族であることがえぐり出されるのである。

レオンティノスの例においては、死体をみたいという黒々とした欲望に対峙して、これを押しとどめようとする、理知と言うよりはもっと直截な憤り、嫌悪感を指していた。自身を引き戻そうとするこのような直截な気

概は、その発動の要として、自らが不正をしていると思うか、あるいは、自らが不正な仕打ちにあっていると思うか、の場面にあつて、不正をしていると自認する場合は、罰として何をされても憤ることがないのに対して、他方、不正を受けていると感じる場合には、この憤りが、理知によってなだめられて呼び戻されるまで、あくまでも憤り続けるというところで分かれてくる。してみれば、気概はそれ自身一種の道徳的判断の主体であり、また、それに基づく行動の担い手ともみなせよう。しかるに、不思議なことに、以上の気概の働きについて、これが理知的部分の一種族として包含され、魂・こころは欲望的部分と理知的部分の二分構成になるのか、それとも、両者ともそれぞれに異なる第三の部分として「気概的部分」として存立すべきものであるのかというソクラテスの問いを受けて、それは容易に理知的部分と区別できる。なぜなら、「子供でも気概はあるのに対して、理知は後から身につけるか、結局身につかない者もいる」とグラウコンが答えるのを引き受けて、ソクラテスは、「確かに獣の場合でもそうだ」と肯い、ここで気概は単なる激情のようなものに位置づけられるようになる。そして、このように分別を欠いて怒る例として、ホメロスの詩句が証拠として出されるのである。ホメロスの文脈そのものは、先に述べたように、はっきりと義憤を現しているオデュッセウスの胸中の心臓・心である。内容的に、不正を憤る気概であり、子供や獣の誰にでもみられるような怒りの激情ではないであろう。この落差をどのように解したらよいのであろうか。まず、この部分は「分別をわきまえずに憤慨している」とされるものの、それは、今しばらく待つて復讐の時機を見計らうというオデュッセウスの計略を欠いているという意味であつて、その心自体が、不合理な激情の赴くままであることを意味しない。『国家』第4巻の理知的部分の働きが巧みな思量であつたことを想起すれば、この点は納得がいくであろう。さらに、示唆を与える表現として、「気概の部分は、第三の種族として区別され、悪しき養育によってだめにされないかぎり、理知的部分の補助者であることを本性にするものであろうか」という問いかけがある²⁶⁾。ここでは、気概が気概の部分として形成されて、理知的部分の補助者として本性的に位置づけられるという方向が示されている。しかし、

同時に悪しき養育の影響をまともに受けるものであることも示唆している²⁷。「本性とする」とは対立しているものが強制的に従わせられているというのではなく、それ自体の固有の働きとしてそのようになることを意味する。ホメロスの引用されない次の行「耐え忍べ、わが心よ、おまえは昔もっと恥ずかしいことに耐えたではないか」が響いていると考えるのは考えすぎであろうか。気概の部分としての心のあり方において、魂・こころ全体のあり方が決定されている機微が伺われる考察と言えよう。しかし、このことは、『パイドン』で確立したかに見えた魂の魂としての独立優位性にとっては危機的であった。すなわち、何らか身体的振る舞いをする部分を、魂の中に組み込まなければならない現実に直面しているからである。それが単なる無際限の欲望であるならば、ひたすらに無分別なものとして外化することもできたであろう。しかし、魂の気概的部分の形成は、そのような魂を持った人として、まさに現実に存在してくる²⁸。その時、現実の主導権はどこにあることになるのであろうか。一見安定していた魂の三部分の関係が容易に主導権争いを引き込んでくるゆえんはそこにあったのである。（『国家』第9巻参照）

3

魂・こころの全体のあり方を、さらに身体部位の構成の人間学として考察を試みたものが、『ティマイオス』の人間論である。この中に現れる心臓・心の位置づけを次に確認しよう。『ティマイオス』は、宇宙論から始まって、身体論へと展開している。この論をどのように受け止めるべきであるかは、論が分かれている。『ティマイオス』全編の「ありそうなお話」というプラトンの再三の注意書きからして、そのまままともに受け入れるのには慎重であるべきだと指摘が当然ある²⁹。他方、ガレノスは、これをまじめなものとして受け取って、ストア派の心臓中心説に反対する自説を補強する典拠として、ヒポクラテス説と並べて検討している³⁰。いずれにせよ、プラトンの教説 doctrine が何であったか、ではなく、彼の探求を見つめていくことを大切にしたいわれわれとしては、『ティマイオス』にお

いて、魂・こころが身体、とりわけ心臓にいかに関わっているか、この心臓が「心」としてどのように考えられているかを考察したい。

『ティマイオス』において、心臓・心(καρδία)は、4ヶ所現れる。一つは、65dで、舌の感覚との関係で、「舌から心臓までのびている小さい管」という表現である。感覚の中心としての心臓というアリストテレスの心臓理解との関連が予想されるが、『ティマイオス』において、心臓がそのような位置を占める記述はほかにはなく、五感の統合ステーションの地位に心臓が据えられることはないと言えよう。むしろ、興味深いのは、他の3ヶ所で、『ティマイオス』において、身体の創造について次のような記述の中に置かれたものである。少し丁寧に見ていこう。

まず、創造主である神が、「様々の原因をいわば素材のように用いて」人間などを創造する際、「神的なものについては自らが造り主となり、死すべき者たちの生成については自分の子どもたちに造ることを命じた」という。さて、「彼らは、父をまねながら、こころ(魂)の不死なる始源を受け取ると、次には、そのまわりに死すべき身体をまるく造り [=頭]、乗り物(ὄχημα)となるように、それに身体全体を与えた。その身体の中に、魂の別の種類のもの、つまり死すべき種類のもを、もう一つつけ加えて組み立てようとした」³¹⁾。この「乗り物」という表現は、まさに心身二元論の典拠として受け止められるかもしれない。しかし、身体に浸透したものとして「死すべき魂」も同時に措定していることは『ティマイオス』の新機軸である。

さて、この種の魂は、「自分の内に恐ろしい諸情態(παθήματα)を必然的にもっている」という。それらは「悪事への最大の餌である快、次に善いことを避けさせる苦、さらに思慮のない助言者である無謀と恐れ、押さえがたい気概、あてにならない希望など」であるが、それがあつても「必然」だという。そして、「まさにこれらの諸情念によって、万一やむを得ない場合は除いて、かの神的なものを汚すことがあつてはならぬとはばかって、この死すべき魂の種族を神的なものから離して、身体の中の別の住居に住ませるようにした」というのがその子細である。以下、「その隔離のために、頭と胸との間に頸を介在させることによって、この両者を仕切

る境界となる峽部を造り、こうして、胸、あるいは、いわゆる胸郭の中に、魂の死すべき種族を縛り付け」ようとし、さらに、「この種の魂の中にも、本来的にすぐれたものと劣ったものがあるので、ちょうど女の住居と男の住居を区別するように、この胸郭の腔所にも改めて、その真ん中に隔壁として横隔膜を置き、そうすることで、これに仕切りを入れた」として身体図式になぞらえて、魂・こころの秩序を図っているのである³²⁾。

さて、このような図式のもと、「魂のうち、勇気と気概を備えた、負けず嫌いの部分は、これを、頭に近く、横隔膜と頤の間に住ませた」とされるが、それは、「魂のこの部分が、理性の言葉のよく聴ける位置」(70a)だからというのである。このような主導と聴従というかたちで、魂・こころの一体化はなされている。

このような魂・こころの機制のもと、心臓についての言及がなされている。それは、「血管の結節をなし、身体四肢を余すところなく激しくめぐっている血液の源泉をなしている心臓(καρδία)を、衛兵の待機所へ配置した」(70a7)とするものである。その役目は、「外部からあるいは内部の欲望からでも、何らかの不正行為が、身体諸部分のところでなされているという理性の通告に、気概が激してたぎるようなとき、身体内のおよそ感覚能力を持ったものがどれでも、あらゆる狭い通路を通して、敏速に、その勧告や威嚇を感知して、その言うことを聴き、全面的に従うように、そしてこのようにして、それらが、かの最もすぐれた部分に、かれらすべての間で無事に最後まで主導権(ἡγεμονεῖν)を行使させるようにするためであった」。ここでは、かの「不正の感知に対する気概の働き」が再確認できるが、やはり、頭脳内の魂の主導権への聴従に位置づけられているのであり、その独立は認めがたい。そして、気概の発憤と連動して起こる「心臓(καρδία)の動悸」(70c1)に対しては、激昂する部分のこのような高ぶりが、火の熱によるものであるので、そのため救援策をこうじて、肺という種類のものを植え付けた。それは「まるで海綿のように、内部にいくつもの孔があいているものなので、こうして、氣息や飲み物を受け入れて、心臓を冷やし、灼熱状態にあるそれに、元気を回復させ、くつろがせることができるようになっているのである」。つまり、「肺そのものはこれを心

臓(καρδία)のまわりに(70d3), ちょうど柔らかい詰め物のようにめぐらせ「気概の憤りが心臓の中で頂点に達するときにも, 心臓が, ふかふかした抵抗のないものに向かって弾み, また冷やされることになり, それだけ労苦も軽減され, その分だけ余計に気概に与して, 理性に仕えることができるようになるため」に, 周到に備えられているというのである。

『ティマイオス』において, 心臓は「心」なのだろうか. 魂・こころの気概の部分が, 首と横隔膜の間に位置するとされながら, これと血管の結節点である心臓とは, 同じものであるとは言えないであろう. それでは両者はどのような関係にあるのか. 心臓が, 「衛兵の待機所」であり, 不正を感知すると怒りを発憤して事態に対処する. 他方, 怒りで熱くなりすぎるのを防ぐために, 周りの肺に取り込まれた空気や液によって冷却され, 穏やかに身を引いていく. 一見したところ, 魂・こころの働きに随伴して, 機械的に熱くなったり冷やされたりする働きを司り, 要するに, 血液の熱源としての中心性を有しているにすぎないように見える. しかし, 両者はともに胸中に位置するように語られている. ここで注意しておかなければならないことは, ガレノスは彼なりの解剖学的アプローチをもって人体を「対象」として扱っているのに対して, プラトンはここで, 魂・こころの場所として, 生きられている身体を問題にしていることである. その際, 中心ないし起点となるのは, 頭部に位置する不死の魂・こころである. この魂に対して, これをいただく乗り物としての身体的位置に「死すべき魂・こころ」が据えられる. その際に, 頭部からの近い遠いの隔たりが指定されているのである. しかし, それらは隔てられながらも, 人間の不可分の部分をなしているのである. これが身体を持って生きている人間の必然なのである.

結 び

プラトンは, まず『パイドン』において, ホメロスにおいて身体に位置する「心臓」として措定された「心」と対立する「別なもの」として魂・こころを純粹に取り出すことを企図した. 『国家』では, この魂・こころ

の中に「別なもの」として、やはりホメロスで「心臓」と言われていた気概的部分を繰り込みつつ、その自立の有様をえぐり出した。最後に、『ティマイオス』において、身体はそれぞれの部位に役割があてがわれながらも、どこかに、魂・こころを局在させるではなく、全体として魂・こころの乗り物として、こころがこの世に場所を占める身体に浸透するものとなっている。むろん、頭の中、ないし脳に、不死の魂・こころが宿るものとして、理性中心の上方指向を、強く打ち出しているのではあるが、しかし、身体になぞらえて、この主導的部分からの距離化のうちに、心臓も位置する「死すべき魂」も位置づけられているのである。これが成熟したプラトニズムである。その意味で、「心臓」は精神活動ないし人格全体の中心の位置を占めないが、魂・こころの全体の中に不可分に組み込まれていることが確認できるのである。

さきに西方の中世末から近世の心臓を象徴化した図像を確認したが、東方のアイコンにはあのようなキリストやマリアの描き方はないのではないと思われる。他方、キリストの頭部ないし胸像を描いても、十分に、受肉したキリストのアイコンであり得るのも、そのような理解が底流にあるからではないかと想像するのである³³⁾。

しかし、ギリシア哲学の心臓の取り扱い方はプラトン流だけではない。アリストテレスやプラトンとは対照的なストア派の心臓の取り扱いも注目に値する。また、西方東方問わず、キリスト教の根底にある聖書の心臓-心理理解の文脈、およびそれぞれの受容と変容を突き合わせてみることによって、冒頭のアウグスティヌスの独自性も浮き彫りになろう。しかし、これらについては、稿を改めて論じなければならない³⁴⁾。

注

- 1) A. Maxsein, *Philosophia Cordis*, Salzburg, 1966. 金子晴勇「「心」(COR) の概念」『アウグスティヌスの人間学』創文社, 1982年, 229-286頁。
- 2) Kazuhiko Demura, "Cor nostrum in the Confessions of St. Augustine", P. Allen (ed.), *Prayer and Spirituality in the Early Church* Vol. 2, Brinbane, 1999, pp. 187-196.
- 3) Cf. *Augustinus Lexikon* の G. Madec による Cor の項目。

- 4) たとえば, 作者不詳の木版画『聖なる心臓』(1470年以前, アルベルティーナ版画素描館所蔵), 『記憶された身体——アビ・ヴァールブルクのイメージの宝庫』国立西洋美術館 1999年, fg. 2. また, クラナッハ (Lucas Cranach) の木版画『心臓のついた信仰の盾』(1505年, ベルリン国立版画館所蔵) など参照.
- 5) 『死者の書』プトレマイオス朝 (前 300 年アケミム出土, 大英博物館所蔵). 『永遠のエジプト——大英博物館古代エジプト展にみる来世賛歌』1999年, 朝日新聞社, 24-25 頁参照.
- 6) クリュシッポスの主張. SVF II 837 = DL.VII 159.
- 7) 『青年と老年について』469a5-7.
- 8) 『動物運動論』703a14-16. なお, 氣息 (プネウマ) と魂および心臓さらに「心」との関係は古代において哲学, 医学・生理学, および神学にとって重要なトピックとなっている. 渡辺邦夫による『岩波 哲学・思想事典』のプネウマの項目参照.
- 9) L. Brandwood, *A Word Index to Plato*, Leeds, 1976.
- 10) 「(正しく敬虔に生涯を送った者は) 甘い希望がその人につき添って, 心をはぐくみ, 老いの身を養う」『国家』第 1 巻 331a (藤沢令夫訳).
- 11) (そのような教育を受けると) 「若者たちは『いったいどのような心臓になる』と思うかね」『国家』第 6 巻 492c (藤沢令夫訳).
- 12) 「ぼくは, 何か気の毒な場面を自分が語るときには, 両目は涙で一杯になり, また恐ろしいことやすごいことを語るときには, ぼくの髪は恐怖に直立し, 心臓ははげしく動機を打つのです」『イオン』535c (鈴木照雄訳). 「[子供が寝つかないときなどの] そのような [恐怖と狂気の] 状態に対して, ひとが外からゆすぶりが与えられると, 外から与えられた運動が, 恐怖と狂気という内なる運動に打ち勝ち, 打ち勝つことによって, 各人の心臓の苦しい鼓動を静めて, 魂の中に静かさや安らぎとを生ぜしめる」『法律』第 7 巻 791a (池田美恵訳参照).
- 13) 『パイドン』118a.
- 14) 『饗宴』215e (森進一訳).
- 15) 『饗宴』218a (森進一訳).
- 16) 『パイドン』94d-e, 『国家』第 3 巻 390d, 第 4 巻 441b. この『オデュッセイア』の詩句以外での, 「心臓」の用例は, 『国家』第 3 巻 389e の『イリアス』I.225 の「酒浸りの男よ, おまえの目は犬のよう, おまえの心臓は鹿のようだ」という引用だけである.
- 17) 『国家』第 3 巻 390d.
- 18) 「この詩行は, 『国家』III. 390D, IV. 441B にも, おなじような関連で (つまり IV では, いわゆる魂の三部分説という考え方のもとに, 魂の思慮的な部分が, その情意的な部分に対して, あたかも別のものが, それとは別のものに対して

語るように、それを叱責しているというふうな解釈のもとに)、とり上げられている」松永雄二訳岩波プラトン全集『パイドン』注, 275頁。

- 19) ブルーノ・スネル『精神の発見』第1章「ホメーロスにおける人間把握」, 新井靖一訳, 創文社, 1974年, 15頁以下参照.
- 20) ヒポクラテス「神聖病について」ch. 20 (小川成恭訳).
- 21) 『パイドン』96b-c (岩田靖夫訳参照).
- 22) 『パイドン』94c-e.
- 23) E. R. ドッズ『ギリシア人と非理性』第7章「非理性的霊魂と父祖相伝の集積に関するプラトンの見解」(岩田靖夫・水野一訳) みすず書房, 1972年, 259頁以下参照.
- 24) 『国家』第4巻440a (藤沢令夫訳).
- 25) 『国家』第4巻441a-c.
- 26) 『国家』第4巻441a3.
- 27) 『国家』における感情教育が、もっぱら「魂の気概的部分」に関わること、および、感情(パトス)の問題へのプラトンの生涯かけての取り組みについては、廣川洋一『古代感情論』岩波書店, 2000年7月, 1-81頁に詳しい探査がある.
- 28) 日本語では「肚が出来ている人」と言うことになるろう.
- 29) たとえば、種山恭子訳岩波プラトン全集『ティマイオス』解説, 265-267頁.
- 30) Galenus, *De Hippocratis et Platonis Dogmatibus*. 二宮陸雄『ガレノス 霊魂の解剖学』, 平河出版社, 1993年, 326-347頁参照.
- 31) 『ティマイオス』69a-c.
- 32) 69c-70a. このような「配置付け」に対するプラトンの腐心を種山は正当に強調している. 前掲書, 解説267頁.
- 33) イコンの正面性ないし平面性もこの観点から考えることができるかもしれない. 西欧での立体彫像の普及と、まさに対照的である.
- 34) 本論は、東京都立大学哲学会第24回研究発表大会(2000年5月27日)において、「こころと心——ギリシア哲学は心臓をどう取り扱ったか」という題で発表したものがもととなっている. 大会にて、貴重な示唆を与えてくださった加藤信朗先生、神崎繁先生、田島孝先生はじめ、会員諸賢に感謝いたします.